北海道・層雲峡観光特集

特別対談

コロナ疲れ、大自然で癒やそう

「カムイミンタラ（神々の遊ぶ庭）」と呼ばれる大雪山国立公園。その観光の拠点となる層雲峡温泉は今年、命名100周年を迎えた。コロナ禍で苦しい状況にあるが、アフターコロナ時代への布石を着々と打っている。上川町の佐藤芳治町長と層雲峡観光協会の西野目信雄会長（ホテル大雪）に層雲峡の魅力、新たな取り組みなどを語っていただいた。司会は論説委員の内井高弘。

（9月上旬、町長室で）

連携協定で新しい風起こす　佐藤氏

北海道上川町長
佐藤　芳治氏

――町の観光業はいまどんな状況ですか。

佐藤　コロナ禍で観光業のダメージは極めて大きい。心が折れて挫折してもおかしくない状況だが、西野目会長を中心によく頑張ってくれており、感謝しかない。今まで経験したことがないだけに、ここから学ぶことがたくさんある。それをどう生かしていくかだ。先が見えないのがきついが、別な意味でチャンスと捉え、新たな観光施策を考えていきたい。

西野目　業界は頑張っているというのが偽らざる気持ちだ。感染者が減り、ワクチン接種も進んで先が見通せれば施策を打てるが、そこができないのがつらい。インバウンドが消滅し、道外客も減った中で、道民を地域で奪い合っているのが実情。緊急事態宣言が1日も早く解除され、人の交流が活発になることを願うばかりだ。

――GoToトラベルのような観光支援策への期待が大きい。

西野目　これまでのような全国一律は難しいと思う。47都道府県に原資を配り、土地柄に合わせて予算を消化してもらうことも検討していい。その意味では知事の観光に対する力量が問われる。また、業界も声を上げ、言うべきことを言わないとだめだ。

――今年は層雲峡命名100周年です。

西野目　明治の文豪、大町桂月が大正10年8月に当地を訪れた際、滞在先であった塩谷温泉（現層雲閣グランドホテル）の宿主である塩谷水次郎さんから頼まれ、当時の「ソウウンベツ」という地名からこの地を層雲峡と命名したのが始まりとされる。

旅行に対する意識も様変わりし、これまでの延長線上では生き残れない難しい時代だ。大雪山や層雲峡だけでしか体験できないモノやコトを提供していくのが大事になってくる。五感で得られる感動をデジタル技術を駆使して商品化することも考えていきたい。

先人たちが築いてきた礎を受け継ぎながら、大雪山国立公園の恵みを生かした地域づくり、日本を代表する山岳リゾートとしての観光地づくりを目指して、住民の方々と共に努力を積み重ねていきたい。

佐藤　先輩たちの苦労は大変なものがあったと思う。残してくれた財産を無駄にはしない。新しい時代に向け発展していくために、知恵と工夫で乗り切る。観光の価値を高め、新たな視点で見せていきたい。

旅行会社との関係強化図る　西野目氏

層雲峡観光協会会長
西野目　信雄氏

――層雲峡ならではのイベントといえば「氷瀑まつり」ですね。

西野目　北海道三大冬まつりの一つで、今シーズンは来年の1月29日から3月13日まで開催する。コロナ対策には万全を期して臨む。イベントは続けるのが大切。いったん止めると再開するのが大変だ。形を変えながらでもやり続ける。知床や網走、阿寒でも冬のイベントを予定しており、それらと連携して、周遊に役立つイベントとして展開したい。また、紅葉のライトアップイベント「奇跡のイルミネートⅣ」は9月18日から10月17日まで開催。今年はエリアを拡大し、さらにパワーアップする。日本の紅葉は層雲峡から始まる。見事な紅葉を楽しんでいただきたい。

佐藤　氷瀑まつりは47回目になる。半世紀にわたり続けていることはすごいことで、関係者の皆さんに敬意を表したい。町にとって大きなイベントだ。

――アフターコロナに向けた意気込みを。

佐藤　町の財産はこの雄大な自然。それを生かしたまちづくり、観光振興に取り組む。その中心となるのはまさしく人。19年度から町の魅力づくりを担う「地域おこし協力隊」を積極的に採用する一方、移住定住促進プロジェクト「KAMIKAWAWORK」を推進している。若い人も育ってきており、われわれが気づかない素材を掘り起こしてくれる。働きやすく住みやすい環境を作り、しっかり応援していく。それが観光振興にもつながると信じている。

ユネスコエコパーク登録目指す　佐藤氏
北の山岳リゾートで差別化図る　西野目氏

――コロンビアスポーツウェアジャパンに続き、近くクラブツーリズムとも連携協定を結ぶと聞いています。積極姿勢が目立ちますね。

佐藤　大雪山国立公園の自然は素晴らしく、これほどダイナミックな観光資源はない。そこに魅力を感じ、イメージ向上につなげようという企業戦略がある。コロンビアの進出はまさにそれだ。クラブツーリズムに限らず、教育機関のインフィニティ国際学院とも連携協定を結ぶ。新しい風を取り入れることで活性化を図っていく。

「北の山岳リゾート」を目指すため、層雲峡をスイスの山岳観光地・ツェルマットのような場所にするのが私の夢。山岳だけでなく、ラフティングやカヌーなどアドベンチャーツーリズムも育ちつつある。積極的な連携協定で魅力の幅を広げていきたい。

西野目　上川大雪酒造の誕生、フレンチレストラン「フラテッロ・デイ・ミクニ」の誘致など、町長は新しい風を起こしてくれ、とても感謝している。自然の魅力を生かした町づくりである「北の山岳リゾート」構想は理想的なビジョンであり、差別化の武器にもなる。実現に向け、観光協会も協力を惜しまない。

――2018年度に「カムイと共に生きる上川アイヌ～大雪山のふところに伝承される神々の世界～」として日本遺産に認定されています。

西野目　現在、国内で登録されているのは志賀高原やみなかみ、甲武信など10地区ほどと聞いている。道内初となればインパクトもあり、観光面でも大きなメリットがある。

佐藤　世界遺産は名誉だが、何かと制約も多く、維持していくのに大変だという声も聞く。層雲峡の良さを引き出し、地域振興につながるのは、自然と人間社会の共生を目指す「ユネスコエコパーク（生物圏保存地域）」だと思う。北海道には1件もなく、関係機関などとの相談のうえ、登録第1号を目指して取り組みたい。

西野目　現在、国内で登録されているのは志賀高原やみなかみ、甲武信など10地区ほどと聞いている。道内初となればインパクトもあり、観光面でも大きなメリットがある。

雄大な自然美をVRで体験

層雲峡ビジターセンター

北海道の屋根といわれる大雪山国立公園は、面積約23万㌶に及ぶ陸域としては日本最大の国立公園だ。柱状節理の断崖や黒岳などの自然美は圧巻で、訪れる人のハートをつかむ。

そんな自然美を身近に楽しめるのが層雲峡ビジターセンター（上川町）にある非接触型のVR（バーチャルリアリティ＝仮想現実）体験システムだ。

どこにも触れることなく操作可能なモーションセンサー技術を用いた非接触式ディスプレーとVRゴーグル（10台）で、ダイナミックで臨場感あふれる映像を楽しめる。ゴーグルはハンドル式の手持ち型に仕様を変更しており、コロナ対策はバッチリ。

大雪山国立公園管理事務所の佐藤巧・国立公園利用企画官は「非接触型システムの導入は、環境省が直轄する施設としては全国で初めて」と話す。

大雪山の魅力を7分50秒に凝縮した「Welcome to大雪山国立公園」や大雪山と層雲峡谷の上空を鳥になった気分で空中散歩する「VRスカイウォーク」、ガイドの解説を聞きながら大雪山の主要コースを巡る「VR表大雪バーチャルトレッキング」など13コンテンツを用意。

13コンテンツを用意

8K映像のため、画面は鮮明で迫力満点。「VRゴーグルの場合、気分が悪くなる方もいる。そのため、対象は13歳以上で、座ってご覧になるよう勧めている」と佐藤さん。既に貸し出しを希望している施設もあるため、今後検討していく方針だ。

層雲峡ビジターセンターは☎01658（9）4400。

非接触式ディスプレー（上）とハンドル式のゴーグル

黒岳ロープウェイと、日本一早い、美しい紅葉

層雲峡観光の拠点となる層雲峡温泉

アウトドア体験支えるショップを開業

コロンビアスポーツウェアジャパン

上川地方の松を使ったテーブルや椅子などを置いている

衛藤　智さん

黒岳ロープウェイ駅舎内
大雪山ツアーズデスクも

北海道上川町と3月に包括連携協定を結んでいる総合アウトドアブランドの「コロンビアスポーツウェアジャパン」（東京・新宿）は7月末、大雪山国立公園の北の玄関口となる層雲峡温泉黒岳ロープウェイ駅舎内に、登山用品などを扱うコンセプトショップ「コロンビアフィールドストア黒岳ロープウェイ店」をオープンした。

駅舎3階に設けたショップでは、町や大雪山でのアウトドア体験に必要な商品を販売している。同じフロアにはカフェ「ブラック・マウンテン・コーヒー・バイ・コロンビア」を開設。こだわりのドリンクや道食材を使用した「ごはんとおやつの研究所」の焼き菓子も提供する。

また、地域DMOの大雪山ツアーズ（西野目信雄社長）が運営するアドベンチャーデスクも置かれ、観光情報の発信など層雲峡観光をバックアップする。

営業時間は平日が7～16時、土日祝日が7～18時。不定休。

「アウトドア好きにとって、大雪山国立公園は憧れの地といえる。一度は行ってみたい場所」というのは同社ブランドマーケティング課長の衛藤智さん。その地にショップ、カフェ、ツアーデスクを兼ね備えた店舗を構えたことはブランドイメージのアップにつながりそうだ。

ショップではウエアやリュックなど登山に必要な商品を販売するが「ここでしか買えない、Tシャツやボトルなど土産品にも注目してほしい」という。

今後、町と組んで自然環境保護などを目的としたコロンビアハイキングツアー（仮称）などを企画、包括連携協定を実のあるものにしていく方針だ。